
2つの手

テバサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの手

【Nコード】

N3924Q

【作者名】

テバサキ

【あらすじ】

ここハンス大陸は『神』と呼ばれる者が治めていた、『神』は不思議な両手の力を使いこの大陸を治めていた。その力は、

右手が『治癒』の力で、左手が『破壊』の力である。

しかしこの圧倒的な力を持つ『神』が何者かの手で殺された。

そして圧倒的力が無くなったせいでハンス大陸は戦争が多発した。

そして『神』が残した両手の力が二人の人間に与えられ、『神』を

殺した者を見つけ、そしてハンズ大陸を平和に戻す旅が始まる。

プロローグ 『神』の死（前書き）

どうもテバサキです。

この作品は知り合いと協力して作りました。
では、どうぞ

プロローグ 『神』の死

——15年前——

ここハンズ大陸では『神』と呼ばれている者が存在している。

『神』と呼ばれし者はある2つの手を使い、この全大陸を治めている。

『神』と呼ばれし者のその両手には、右手は『治癒』、左手は『破壊』という能力が秘められている。

『治癒』は他のヒトの傷や病・心を癒し、完全に回復ができる救いの手である。

『破壊』は他の生命や物体などを崩し、完全に消滅させる災いの手である。

その両手の力を使い大陸に王国を作り幸福と不幸をもたらしている。

しかし、ある日を境に『神』と呼ばれし者の持っている力を欲したのか、何者かによって暗殺され、永遠の故人となってしまった。

「なぜ私はこの救いと災いの手を持っている？」

「私は『神』などではない、ならばなぜ暗殺などという手で殺される？なぜ私を殺した？この両手がいけないものなのか？」

「ああ、もう私はこの世では生きていけないのか。ならば、残そう。この両手を難なくこなせるものを1人——いや、2人に託してみよ

う。そうならば片手ずつに持っていくことだろう。この2つの手の意味を私は知らない。だから、託そう。この両手の意味を知ることができる者たちへと託そう」

「私は、『神』ではないっ 私は、私は……」

『神』と呼ばれし者は何か呪文を唱え自ら手にしていた2つの手を大陸の両端に飛ばし別れ別れにした。誰かがその両手を知り・理解する者に渡ることを、願いながら――

第1章 「私は壊したくない……」

——15年後 現在——

「……ことを、願いなから——」

この小さなコリル村に小さな木に寄り添いながら本を音読しているのだろう。

少女の左手にはベージュ色のした革の手袋をはめている。時折空を見つめ、首を休ませながらその赤色の瞳で本の文字を目で追って今度は目読をしている。

…とそのとき寄り添っていた木の後ろから「おいしい二サナあ」と中年ぐらいの体のしつかりした男の声が降りかかってきた。

「うわあっ！おじさん！！いたの？」

「何がいたの？だ！今日はウォルタ王国から新しい本がジャンツジャン入荷してくるんだ。手伝わねえと家に今日中では帰れんぞ。」

そうだ。そういえば今日ウォルタ王国という水源の都からハンス城下町を通りこのコリル村に新しい本の入荷日だったことをすっかり忘れていた。

なんせこの村の書籍の館にたくさんの本が来ることは珍しいものなのだ。

「あ……ああそっか今日はその日だったっけ……」

「ああそつだつそれをお前はこの日に限つて本を……何だまたそれを読んでるのか。お前はよくその本が好きになれるなあ」

男はそう言つて自分の頭をかき回した。

「ん〜 好きつて訳じゃないんだけど、なんとなく気になるんだよ〜」

ニサナはまた手に持っていた本に目を通す。

「この本お母さんからもらった本だから……」

「……まあいい、そらいくぞ。早くしないとキールの野郎に怒られる。」

男は後ろに振り向き書籍の館の道へ歩き出した。ニサナもそれに続いて歩き出す。

小さなこのコリル村で最も大きい建物であるこの書籍の館にニサナはよく手伝いをしに来ることがある。そしてこの建物の主人は手前で歩いているがっしりした体格の男。名はダツケル・フリース。歳は37・8といったところだろう。

髪は青く、背が高い。瞳も青で顎鬚が立派に生えている。ニサナが両親のことを想い、泣いているところをよく慰めていた。

ダツケルはニサナが幼い時に孤児院にいたところを引き取り、いまも館で現役主人を続けながら一人でニサナを育ててきた。今では父親のような存在なのだろう。

そしてダツケルの後ろを歩いている少女、ニサナ・アイ。15歳。

赤い瞳にベージュの革手袋を左手にはめ、髪は長めのクセつ毛があるように平和主義者だ。外出時や館の手伝いの時以外には、いつも片手に形見である本を常に持っている。

ニサナは幼いころに両親が何者かに襲われ、殺されている。ニサナは両親の思い出こそ無かったものの、唯一覚えていたのは母から読んでくれていたこの本だけでしかない。両親が殺され、数日後孤児院に引き取られるときも、引き取られた後も、この本だけは目に涙を浮かべながら手離さなかったらしい。ただそれだけだった。

「よし、着いたぞ。つといたいた」

ダツケルは館の前にいるキールを見つけとつさに「おーい。キール」と呼びかけた。

ダツケルの呼び声に気付いたのか、こちらに振り向き「おー、ダツケルやつと来たか。もう少し遅れたら激怒してたところだぞ」と笑い気味に言った。

「少し遅れただけで激怒は無いだろ」ダツケルは苦笑いをし、言葉を投げあった。

「キール兄さん！」ニサナは嬉しさのあまりキールに飛びついた。

「おおっと。ニサナ、久しぶりだな。元気にしてたか？」

キール・ランディはダツケルとほぼ同じ年で親友だ。金髪で髪は長く後ろに縛っていて瞳は青紫だ。背はダツケルと近いが鬚は無い。体格は普通のほうだ。前にダツケルと同僚として一緒に働いていたが、急に村を越さないといけないという理由で村を離れてしまった。

だが、書籍の館が大きくなると聞いて急遽この村に戻ってきたのだ。

「うん！またキール兄さんに会えたあ！ねえ、キール兄さんの生活はどう？越した所ってどんなところなの？」

ニサナは唐突に聞く。

「あ、ああそうだな。まあ良い生活はできてるよ。越してすぐに良い仕事を見つけられたからな。しかも場所はハンズ城下町だしな」

「へえ〜、城下町なんだあ。いいなあ。私も行ってみたいなあ」

キールは次に不審な顔をして続けた。

「だけど最近少し物騒な噂があってね……」

「え？」

キールはさらに続けようとしたが、大量の本を詰め込んだ荷車を馬が引いており、書籍の館の前で停止した。

「お、ようやく着いたみたいだぜ」

ダッケルが言っただけで荷車のほうに歩み寄った。

「ウォルタ王国の者だ。書籍の館はここでよろしいか？」

荷車に乗っていたウォルタ兵士が尋ねた。

「ここで間違いありません。兵士殿、ウォルタ王国から遥々このよ

うな村へ、しかもこの量の本のご配達ご苦労様です。こちらへお止めによりしくお願いします」

ダッケルは兵士の荷車を止めに案内した。

「おい。ニサナ、キール。これから相当大変だぞー。運んでくれい」

「わかったあーおじさん。いこ、キール兄さん」

「よーし。即行で終わらせるか」

ウォルタ王国兵士は荷車を止め、明日にはくると言い残して去っていき、3人は荷車にある大量の本を館へ運び整理して大体の作業を終わらせたころにはもう日が落ちてきていた。

「キール兄さん、今日は泊まって行くの？」

「ああ、今日は館に泊まっていくよ」

「それじゃあ、明日も会えるんだね」

「そういえばキール。作業する前に物騒な噂が有るとか言ってたよな？」

ダッケルはキールにそれは何だと問い詰めた。

「そうだ、まだ言ってなかったね」

とキールはまた不審な顔を浮かべてその物騒な噂話をはじめた。

「あくまで噂なんだが、ハンス城下町地下から獣人が脱走したらしい」

「マジかよ……」

「獣人てあの…地下で働かされてる人たちの事でしょ？何で脱走したの？まさか…人間への復讐とか…？」

キールは続けた。

「いや、そうでもないらしい。脱走の途中、人々が急に魔族から襲われたんだが…」

「それって、危ないんじゃない？獣人が脱走して魔物にも襲われてさ！」

「まあニサナ、落ち着いて聞いとけ」

ダッケルはニサナを落ち着かせ、キールに進めるよう言った。

「そう、危なかったみたいなんだ」

「危なかったみたい？」

ニサナはオウム返しに問い返す。

「ああ、危なかった。だが、その獣人は人々が襲われた魔族を見るとその魔族を蹴散らして襲われた人々を守ったらしい」

「へえ……すごい」

「でもなぜ脱走したかは分からないんだ」

「で？その獣人はどうしたんだ？」

「その獣人は何も言わずに城下町の外へ飛び出したんだ。今もまだ、逃げ続けているらしいな」

噂を聞いていた2人は、少々驚いていた。獣人が人を守ったという

とこで、確かに獣人は仲間意識が強いため味方に危険が生じると味方同士協力し合うものなのだが、獣人に限って人々を守るという行動は滅多に無いはず…。

「なるほどな。一度その獣人に会ってみたいもんだぜ」

「まあ会えるかはどうだろうな。なんせ『噂』だからなあ」

それもそうだといい、3人はダツケルの邸宅へ向かった。

「よしニサナ、今日は疲れたろう」

「うん、あんな荷物の量…もうクタクタだよ」

「そうだな…もう遅い。今日は寝て朝すつきりな」

どうやらダツケルも相当な疲れがたまっているのだろう。ダツケルの目が衰えて見えた。

「おやすみなさーい、おじさん」

「おう、ゆつくりな」

ニサナはダツケルが去るのを確認すると自室のベッドに座り、部屋にある本棚から『獣人』と書かれた本を取り出した。

目次から『獣人の存在』のページをめくり小さな声で音読を始めた。

『獣人とは人であって人ではない、言葉を交わすが元を正せば獣である。人々は獣を恐れ・拒み・隅へ追いやった。人々は獣に富を作らせ、獣から権利をも奪った、獣から人々の身を守るために』

「……身を守るために」この時、ニサナは1つの疑問を抱いた。
(何で人々は隅に…？やっぱ獣…違う、獣人から怯えてたの？)

でもあの噂では、人々を守ったでしょ??)

ニサナは頭をこんがらがせながら本を置き、座っていたベッドの横になった。

(もう…いいや。寝なきゃ)

そう思って目を瞑り、深い眠りに寝入っていった。

第1章 「私は壊したくない……」 (後書き)

どうでしたか？

これは違うサイトでも公開しています。

出来るだけ感想をお願いします。

第1章 2（前書き）

この前の続きです。

どうぞ

第1章 2

月明かりに照らされ始めたハンズ大陸のなか、広い平原を駆け抜ける者が一人いた。その者は何者からか逃げているようだ。

「クソッ、まだ追いやがるのかあいつら……！」

その者の後方にはざっと20体ほどの魔族の群れが不気味な声をあげながら追っていた。

「エモノ…エモノ！オレタチノエモノ……！！」

「コロセエッ…！メシダアッ…！」

魔族の鋭い爪がその者の頭上から振り下ろされる。とっさに鋭い爪を回避し、その先へ駆け抜ける。

「俺は獣人だぞ、この俺がお前たちみたいのに喰われるはずがあるかつ…！そこら辺のちっせえ虫のほうがうまいと思うぜっ」

獣人は右腕でなぎ払い魔族を消滅させた。

「しかし、この量の敵を俺だけでやれるとは思えねえ……どこか撒ける場所があればいいが……この左腕も持たねえな…」

獣人の左腕には少し派手な傷が残っている、どうやら不意打ちを受けたようだ。必死に駆けながら辺りを見回してある一点、小さな村を見つけた。

「村…か、撒くにはちょうど良い場所でもあるが城下町の事もある

が…しかたねえ、あの村に入って奴等を消滅させてやるか…それしかねえな」

そして、獣人は一気に村へ駆けていった。

「魔族ども、こっちだ！ついてこい！！」

「ジユウジンヲオエエツ…！カナラズクツテヤル…！！コロセエツ！！」

「獣人が喰われるはずがあるかってんだ！」

月に照らされた小さい村に獣人が息を潜めた。魔族の隙を付いて消滅させるために静かに待った。そして魔族が現れたところを確認すると一気に飛び掛かった。

「これで終わりだ！魔族ども！！」

ギャツと奇妙な叫び声を立てて2・3体が消滅、続けてなぎ払おうとしたその時1体の魔族が急に鼓膜が破れるほどの声で叫び獣人の動きを止め、鋭い爪を振り上げた。

（…クソツ、これで終わりか…ッ）

思った次の瞬間残り一寸のところで魔族の爪が動きを止めた。

（…？…どうしたんだ？）

魔族達は、あたかも竜を見たかのようにそわそわしはじめた。

「…イル…」

（何が起ってんだ？）

「オソロシイモノガ…チカクニ…イル!!」

相当な程に恐ろしいのか、周りの魔族に急ぐかのように指示を出した。

「コロセ…コロセ、コロセエエッ!! イマスグ…オソロシイヤツヲ…コロセエッ!!」

魔族たちは激しい動きで移動を始めた。

「…!ッ…待てッ!! ツクソ、逃がすか魔族ども!」

獣人は魔族たちを追跡した。あの城下町のような状況にはしたくないだろう。

「クソ、また人間たちに危害を加えるとは…っ!だが、恐ろしいものって一体何だ?」

今は考えていられまいと、魔族を急いで追った。

ダツケルは、魔族の不気味な声で深い眠りから急速な勢いで飛び起き、辺りを見た、同じ部屋の中キールは隣で起きていた。

「キールッ…」

とつさにキールはダツケルの口をとめた。

「分かってるよダツケル。声は小さく話そう」

「……お、おう…」

キールはニサナを起こしてくるようにダッケルに言った。

「ダッケル！」

キールは護身用の剣を一本、投げ渡した。

「昔はよく平原に出て魔族一体に挑んだものだな」

「ああ」

ダッケルは静かに急いでニサナの部屋に駆けていった。

「おいつ、ニサナっ」

唐突にニサナを呼び起こした。

「話は後だ。早く外に出ろ！家が崩される可能性が高え」

「まって！私の本っ」

ニサナは急いであの本を手に取り獣人とダッケルで外にかけて行った。

すると他の魔族がそこら中にいた。

「まだいたのか…… しかもこの量……」

獣人はそうつぶやき、ダッケルは魔族たちを見回して唖然とした。魔族はまだそこらに15対ほどいるだろう。1体がダッケルに襲い掛かったが、ダッケルは難なく避けて魔族を剣で切り裂いた。魔族はその場で倒れ動かなくなった。

「まだやられるかつ」

その次、動かなくなつた魔族を利用して5体の魔族が飛び掛かつてきた。ダツケルは必死に応戦するが、5対相手では歯が立たず間がつめられるいっぽうだった。そこから、一体の魔族が驚くほどの跳躍力でダツケルを飛び越え、

「オソロシイヤツ…シネエエ！」

ニサナに爪を大きく振り上げ襲いかかったが、

「ちっ！」

「おっおじさん!？」

そこに、ニサナをかばう用にダツケルが飛んで入った。

「がぁぁぁぁぁ!！」

魔族の鋭い爪がダツケルの胸部を貫かれた。

「おじさん!？ どうして!？」

「お前を…助ける…ために…決まっ…ている いいから…早く俺…を置いてに…げろ」

大量の血が胸部からドクドクと流れ落ちている。

「いやだ!! おじさんを置いて逃げれないよ!」

「また…何を寝ぼけた事を、俺は…いいから早くに…げろ。その…獣人さん…
よお」

「…なんだ！？おっさん！」

獣人は魔族を止めながら答え、ダッケルは死に間際ながらも話続けた。

「この女の子…ニサナを守ってくんねえか？あの城下町で活躍したんだろう？俺は、もうここで…終わりみてえだからな」

「……わかった！俺はあんたの代わりにどんな状況でも守り抜いてやるからな！安心していろ！」

そしてダッケルは、ほっと安心した顔を浮かべ、ゆっくり目を閉じ動かなくなった。

「いや……いやだよ……死んじゃだよ……いや……いやああああああああ！！」

そのときニサナの左手に履いてあった皮の手袋が消え、その下にあら黒い何かが黒く輝きだした。

「なっ！ なん何だよアレは！？」

獣人は自分の目を疑った。

そこにはニサナの左手から出る黒い光が奇妙な巨大なもう1つの腕らしき物を作り、ニサナの左肩から出てきた。

「……………」

ニサナはダッケルの横で膝を抱えうずくまって泣いていた。
その間ニサナの左肩から出ている巨大なもう1つの腕は……

「ヤツヤメテクレエエエエ」
「アアアアカツカラダガアア」

残りの魔族を見えない力で消し去っていった。

「き……消えた……魔族全員……」

獣人は呆然と周りを見回している。

月に照らされた小さい村に少し肌寒い風が流れてきた。ニサナたちの周りには、崩れたダツケルの邸宅があり、消滅した魔族の粉塵が舞っていた。

「あれは、なんだったんだ？……まさか今のが魔族どもの言っていた恐ろしいもの……なのか？」

「うつ……おじ……さあん」

ニサナは死んだダツケルの前でしばらく泣いていた。そこに獣人が歩み寄って。

「すまない、おっさんを守れなくて……」

「うっいいの……私が悪いの」

「お前は何か悪くない……」

「うつん、違うの、私は見えない力で魔族を呼び寄せているから……」

「見えない力？」

獣人はニサナに聞いた。

ニサナはやつと顔を上げ。

「獣人さんも……みたでしょ、私の中から出てきたモノ、あれも私

の力なの」

「お前の力？」

それはさつき肩から生えてた、あの腕の事だろうか。

「うん、私の両親は魔族によつて殺された、私の力で呼んだ魔族によつてね、でもその時も私怖くて、そしたら私の肩から出てきた力で魔族を消してたの。それから私は孤児院に引き取られたの、孤児院でも私の力は知られ知られていた、私は周りから避けられていて、そこにおじさんが手を差しのべてくれたの。でもまた居なくなっちゃった……何でいつも私の周りに居る人は消えちゃうんだろ……、神様もひどいよね私に幸せをくれないなんて……そういう時何度も思った。私は、壊したくない……家族も、大切なものも、思ひ出も……何も失いたくないって……いつも平和であつて欲しいって……」

「……………」

獣人は黙つて二サナの話聞いてた。

そして、

「俺も少し分かる気がする、俺達獣人は、元は獣だと人間から避けられる立場から孤独とかそう言うのを何度も味わってきた。人間から大地を奪われ、富をも奪われ、人間の下で生きるようになってしまった。だが、俺たちは今でもあきらめていないだろう。いつか人間達と共に、同じ大地の上で一緒に歩ける日が来るのを信じている……だからお前の気持ちが分かる」

獣人は二サナの話と少し似た話を自分で進んで言った。すると二サナから問われる。

「私の本と同じ……でもどうして獣人さんはそんなにしっかり前を向いて進めるの？」

「どうしてか俺も分からない……、でもきつと認めてもらいたいからだと思う」

「認められるわけないよ……」

「認められないかもしれない、でも少しでもその可能性があるならそっちに賭けた方がいいだろう、だから俺は認められるために前を向いて進めるんだと思う」

「私……まだ遅くないかな？」

「ああ大丈夫だ。まだ間に合うに決まってる」

獣人は力ずよく頷いた。その仕草が何故だか一筋の希望のようにも見えた。

「お前は旅に興味は無いか？」

「一応興味はあるけど……」

「じゃあ一緒に来い、目的は無いけど旅をしながらだと前を向いて生きていける、そしたら自然と旅の中で目的が見つかるはずだ」

「ありがとう」

「……そういえばお前の名前は？」

「私はニサナ」

「俺はラキスだ、これからよろしく……ニサナ」

こうして彼らは目的を探して旅に出た……ニサナが願う平和へと……ラキスが信じている人間達と共に歩める日をいつか迎えるために……

第1章 2（後書き）

どうでしたか？

やはりベタでしょうか？

これからもよろしくお願いします。

次回は右手の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3924q/>

2つの手

2011年1月28日12時31分発行